
愛すればこそ

rozan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛すればこそ

【Nコード】
N8283H

【作者名】
rozan

【あらすじ】
哲夫を支える藤代の献身の愛。
やがて、真実の結実期が訪れる。

愛すればこそ

居間の窓から望む森林公園内樹木の色彩凋落に七十歳に手の届く成瀬宗一は、このところ鰥寡孤独かんかこどくの如くやつれ果てた心情と重ねる、そんな日々を過ごしていた。

この日、外出から自宅に戻ってみると、ドア・ポストに丸く膨らんだ封筒が投函されていた。

封筒の中の粗末な紙切れを取り出すと、走り書きで「お父、久しぶり。元気。浅草に遊びに行つての帰りに訪ねてみた。帰つて来たら電話を頼む」と、成瀬哲夫（息子三十六才）からのメモだった。

メモには住所や電話番号、それに女性の名前（藤代）が書かれてあって、浅草土産の小さな鈴と、哲夫の妻なのかも知れない藤代と言う女性と一緒に写った、笑顔のスナップ写真一枚も同封されていた。

——何と気まぐれな奴だ。十二年間余りも住所も知らせず、年賀状の一枚たりともよこした事のない身勝手な奴だと思ふ宗一ではあるが、怒りや不安の感情よりも息子が会いに来てくれると言う、心の躍る思いが勝っていた。

メモに書かれている電話番号に掛けてみると、哲夫が電話に応答し「明日、お父に会いに行くよ」と、暫らく振りとは思えない沈んだ受話器を通した声で、一気に宗一の不安感が高まった。

幼い時期から、哲夫は極度に癪癢を引き起こすことがしばしばあって、年嵩を増すごとに心を閉じる傾向も顕著になっていたことを

思い出すが、そんな哲夫を遅しく育てようと、宗一が野球を教えたことが切掛けで高校と地方の城北大学に進み、両校共にエース・ピッチャーとして活躍をした逞しさを見につけていた。大学卒業後には自宅に戻って直ぐに都内のマーケティング会社に就職し、都内にアパートを借りて单身生活をしだしていた。

その頃より理由は解らないが、宗一と連絡をとりたがらなくなっていた哲夫は数年後に、偶然にも勤務先会社を退職したと人伝に聞き知ったことで、すぐに哲夫の住居を訪ねてみたが、既に何処かへ転居した後だった。

親には転居先を知られたくないかのような周到な転出だと当時は感じ取りながらも、現在に至っているのだが、そんな哲夫のことを、宗一は時々理解しようと考えてることがあり、会社倒産させてしまった同時期に妻の不貞が発覚したことも重なって、離別を余儀なくされたのが哲夫の大学二年の時だったから、心を歪めてしまった一因なのだろうと思うのだった。

そんな宗一の胸の奥底には、どうしようもない虚無感だけを抱きつつも、知り合いの会社に就職して单身生活を送っていたその会社も定年退職し、そして数年後に哲夫に知らせる方法も無く、転居した経緯があった。

1 - 2

翌日、約束通り哲夫は単身で家にやって来た。

野球部で活躍していた時の澀刺とした面影は微塵もなくなっていて、やせ細った体に色褪せたグレー色のスポーツシャツを着て、左上腕部には三本の太い数珠が束ねて不気味に巻かれている。

宗一は一目見るなり怖れを感じて、善からぬカルト集団にでも毒

されているのでは等と想像してしまい、息子でありながらも身の疎む思いに駆られたしていた。

パソコンを設置してある洋間のソファに無愛想に腰掛ける哲夫は、なぜか余所余所しく落ち着きがない。

真つ黒に日焼けした顔ではあるが、何処か死相を漂わせた無表情顔で「お父、玄関に松葉杖が置いてあったけど、脚が悪いんかつ？」と氣遣って訊く。

「今年の四月頃だったが、激しい腰痛や左脚が異常に膨れる痛さで歩けなかったんだ。そんな時期でも食料を買わなければと何とか家の玄関外に出てヨロヨロと歩こうとしていたら、近隣の住民が見兼ねて『使っていない松葉杖があるから、良かったら使って下さい』と言って、持ってきて下さった。

他にも味覚障害や異常な腹の膨れも併発したりして、死ぬ覚悟もした重篤な時期だったんだ。でも先月の八月中旬頃だったが多少の腰痛はあるものの、他の症状は自然に快復したよ。真夏の高温が腰痛には良かったんだろうとも思っているんだ」と、宗一は答えた。

「俺も四月から超音波犯罪集団に攻撃されだした時期なんだ。お父も狙われだしていることが判っていたから俺が守ってたんだ。これからも安心していてくれよ」と哲夫はマジ顔で、奇妙な言い回しで氣遣ってくれた。

「何の事だい？その超音波とやらは？」

「超音波や電磁波が兵器化されているなんて知らないだろうけど、ターゲットにされた家族は遠隔のリモートコントロール波でモルモット化するように、脳に声で指令して来るんだよ。いくら逆らっても意思や自由も奪われて、やがては犯罪集団のロボットにされるんだ。毎日奴等と戦ってはいるんだけど、奴等は日に日に巧妙に操りだしてくるんだ。こんな荒唐無稽な話は信じ難いだろうけど、事実だよ」

哲夫はそう言いながらシヨルダーバッグの中からA四サイズのコピー紙を五枚程取り出すと、予想だにしない奇異な話の展開に戸惑う宗一に対して「これを読んでおいてくれ。信じなくてもいいんだけど」と言いつて、用紙を手渡した。その場では見る気になれない宗一は「預かるよ」とだけ言つて机の引き出しに仕舞い込むが、余りにも変貌した息子に呆氣に取られるばかりであつた。

1 - 3

哲夫が「レストランに行こう」と言い出したから、近くの西欧風のレストランに出かけて行つた。

哲夫はステーキ食を宗一の分まで勝手に注文したことで一緒に食べ出していたその最中のことであつたが、哲夫は窓向きの席が氣になつていゝように、しきりと頭を抱え込む。そして、シヨルダーバッグの中から野球帽とアルミ箔で包んだ板状のものを取り出すと、帽子の内側に入れて被りだした。

「今、超音波犯罪集団から強烈な指令の聲が発せられてきて、苦痛なんだ。戦うと大声を出すことになるから、もうこの店を出よう」そう哲夫が言つと、食べ掛けにも関わらず席から立ちあがり、すたすたとレストランの外に出てしまう。

宗一は哲夫の言動と顔の一層の暗い表情などに愕然とするばかりだが、精算を終えて店を出ると哲夫は既に足早に歩き去つていて、振り返りもせず舗道の正面に見える駅のエスカレーターを昇つていく哲夫の後姿を、遠目で追うばかりであつた。

立て続けの異常行動にショックを受けた惣一は、哲夫の置いていった資料が氣になつて、机の中から取り出して読みだした。

驚いたことに、北上と言う著者による『超音波犯罪集団の実態』なるタイトル論文が『都市環境社団法人』のホームページに投稿さ

れた記録コピーのようだった。

記載されているのは被害を受けた人たちの症状や、夥しい被害者の証言内容が列挙されていて、その記述と哲夫の証言が類似していることに、宗一は驚かされる。

直ぐにネット検索をしてみると、正しく『超音波犯罪集団の実態』なるタイトル論文が立ち上がる。

読むうちに哲夫の話すことと類似点が多く、その北上と言う掲載者にコンタクトを取りたい衝動に駆られた宗一は、『都市環境社団法人』に電話を掛けてみた。

「投稿された北上先生は既に当メンバーから脱退されていて、今は連絡先をお教えできません」と電話口の男性担当者は言った。

——哲夫自身、不可思議な現象に耐えられずに色々調べていたんだろうよ。そして、こんな資料を眼にして犯罪による攻撃波の確信を深めていったのだろう。

その他のA四紙には、自らが認めた攻撃波の予測方位地図や、近隣住宅地見取り図の手書きした詳細地図もあり、何箇所かのポイントにはハフオント位の繊細な小文字が、異常と思える程にビッシリとボールペンで書き込まれてあった。

読むことを躊躇うものの何とか目を通し終えはしたのだが、その内容は意味不明な記述ばかりであった。

1 - 4

宗一は電波技術に精通した知人に相談してみると、音響研究所の権威者である、神田氏を紹介された。

「超音波被害を聴いたことはあるにはあるが、然し、超音波によって人の脳に遠隔攻撃を加えて声を強制で発生させられることなど、現代社会に於いての技術ではありえないはず。超音波照射攻撃兵器

ではなくて、強力な電磁波や建物内や障害物に隠れた敵を倒す光パルス刺激のストロボ兵器で、脳のベーター波（十五〜二十五ヘルツ）を利用した兵器は存在するんです。イギリスの治安部隊や米軍でも既に実戦配備済みであると言う事を聞いた事がありますよ。強烈な光パルスを浴びせかけ、一撃で聴覚・視覚、そして運動機能を麻痺させてしまうと言うものだそうですが、けれども音声でかく乱させて他人の意思誘導等が出来るなどとは、考えられませんでしょう」との神田氏の見解だった。

宗一の疑問も多少和らいで、電波通信業の会社を過去に営んだ多少の知識経験上からしても納得できるコメントだったと胸を撫で下ろしたが、念のため、哲夫の居住地管轄である湯河原警察署に告訴を申し出てみると、「まずは家族の手で電磁波被害なのか精神障害なのかを断定するために、調査をしてください。現時点では特定できる被害報告がなされない限りは、警察では受理も動きも取れません」と虚しい結論だった。が然し、宗一にはこう言う見解がであるうことは、電磁波被害はともかくも、何らかの精神障害は否めないと思うことから、予測は出来ていた。

哲夫にアドバイスの内容文書をファクスで送信してみると、哲夫から何枚ものファックス文書が返信されてきて、特定宗教団体から超音波照射を連日受けていると言うことを繰り返した内容ながら、新たな多くの被害者談が網羅されていた。そして哲夫自らのブログの投稿ネームが書き込まれてあった。

閲覧して信じてくれと言うのだろう哲夫のブログを立ち上げてみると、そのブログには、哲夫の自宅であろう一軒家の玄関先を斜めに映し出す、防犯カメラのリアルな記録動画が載せられていた。

映像には不審者らしき通行人を装った人物がチャイムを何度も鳴らしたり、ガレージの出入り口鉄扉を何度も叩く者が映し出されていたが、宗一の眼には、しつこい新聞勧誘員か何かセールス的な家

庭訪問者ではなかつとも思えるが、事実解らない。

1 - 5

十月五日の明け方だったが、宗一の自宅留守電話に広尾警察署からの呼び出しメッセージが録音されているのに気が付いた。

再生させると「広尾警察生活環境安全課の三枝です。哲夫さんが罪を犯したので身柄を引き取りに来てください」とのメッセージに、宗一の心臓は激しく高鳴った。

一瞬の目眩を伴いながらも直ぐに哲夫の家に電話を掛けた。

「あつ、お父様ですか。初めまして。早坂藤代と申します」

「哲夫の父で成瀬宗一です。初めまして」

「警察から哲夫さんの件で、お父様にも連絡がありましたんでしうか？」と、藤代が訊いた。

「留守番電話に録音されていたんで驚きました。内容は知りませんが、一体、哲夫は何をしたんです？」

「哲夫さんは最近、妄想を抱いて有名な女性シンガーの華さん自分の婚約者だと思ひ込むようになってるんです『自分と同じ超音波犯罪集団に華は隔離されているから、食料を持って救出に港区内にある華のマンション部屋を訪ねた。監禁状態で鍵が掛かっていたから、鍵屋を呼んで開けてもらおうとしたら通報された』と哲夫さんは警察に話したそうですけども、そのマンション部屋は全くの別人の住まいだと、警察の三枝警部さんと言う方が電話で話されました。その際に親族の連絡先を訊かれましたので、お父様の電話を話してしまいました。済みません」

「当然ですからいいんです。そのシンガーの華さんには、哲夫は会ったことあるんでしょうか？」

「全くの妄想で、フィアンセだと思ひ込んでいるだけなんです」

「今日、これから警察に出向きますよ。藤代さんも警察に行かれるんですか？」

「私も行くことになっていきます」と、か細い声で藤代は言った。

1 - 6

広尾警察署の薄暗い四階にある生活環境安全課の三枝警部を訪ねると、「今、早坂藤代さんも此方に向かっていると電話がありましたから、直ぐに来るでしょう」と言つて、宗一を三枝警部の並びの事務席に座らせた。

「事情は早坂藤代さんから訊きましたが、大変なご迷惑をお掛けいたしました」と、宗一は深々と頭を下げた。

「今回は未遂犯罪でしたから、保護責任者として息子さんを連れて帰ってください。早坂さんが来てからでいいですが」と三枝警部が言った。

「でも今の哲夫は精神に何らかの不安を抱えていると思いますし、一緒には帰らないと思うんです。何か重大な事件でも起こして他人様にご迷惑をお掛けしないかと、懸念をしています。精神的な病だと本人は自覚がないと思いますし、強制力を伴う法的な医療検査をお願い出来ませんでしょうか。もし処置入院の結論にいたるのであれば、それも仕方ありません。本人の意思か家族の手で病院診断に向かわせられるなら、それに越したことはありませんが、現状の哲夫を説得する自信はないんです」

宗一は哲夫を必死で病院診断に向かわせようと説得を試みる積もりではいるが、頑なに思い込みの世界にどっぷり浸かりこんでいるのではないかと、思いを抱いていたからだった。

「念のため、その親御さんの思いを都庁の健保審議機関に電話相談をして見てはどうですか」と、三枝警部が面倒くさそうに眉間に皺

を寄せた表情で言い、受話器を取った。そして三枝警部は、一通りの犯罪状況を健保審議機関に説明してくれていた後に「今度はあなたがお願いしてみて下さい」と、受話器を宗一に差し出した。

これまでに知り得た哲夫の錯乱状況を説明したが、磯野と言う女性審議官は「大きな犯罪を犯したわけではないので、処置入院や法定精神鑑定の対象にはなり得ないケースです。でも、午後の一時半までお待ちいただければ、念のためですが審議を掛けてみますから、あなたが今居る警察の方に折り返し結果をお知らせします」と言うことだった。

三枝警部に話を伝えると「では、それまで息子さんを説得していただいて下さい」と言い、哲夫の居る狭い取調室に案内をされた。

1 - 7

哲夫は黒っぽい野球帽にサングラスを掛けて、相変わらずグレーのスポーツ・シャツにジーパン姿で、狭い取調べ室の窓を背にした椅子に両脚を投げ出した、だらし無い格好で腰掛けていた。

「お父、来たんか。この前お父に連れていってもらったレストランのビフテキ、美味かったよ」とサングラス越しではあるが、無愛想顔の哲夫は行き成り他愛い無いことを、悪びれる様子もなく話してきた。

「そうか、でもお前は半分も食べないで帰ってしまったよなつ。美味かったんならまた行くが、勿体無いからその時は全部食べるよなつ。ところで警察から呼び出されて驚いたよ。今まで何一つ他人に迷惑など掛けたことのないお前だと思っていたからさ」

「フィアンセが住んでいるマンション部屋に、俺をコントロールしている奴ら（犯罪集団）が彼女を隔離してんだよつ。だから食料を持って救出に行っただけで、犯罪なんかじゃねえよ」

哲夫はそう言うのと、両掌で頭を抱えだし「今、宮内庁のある人物から指示が来てるんだ」と言っ、ぶつぶつと頭の中の声と争うかのような会話をします。

宗一は堪らず「フィアンセって、誰のことなんだい？」と現実の会話に引き戻そうと、そう言った。

「歌手の華だよ」

藤代が話していた華と言う名前を、哲夫自身の口から初めて聞いた。

「なあ哲夫、親父の頼みごと一つだけでいい。聞いてくれないか。哲夫が精神を患っているとは思いたくないし、安心の為に病院で検査を受けてくれないかい」

「お父、精神病院に行けって言っかんか……もういいから帰ってくれ。いいから帰れよっ！」

哲夫は語気を強めて、宗一に敵愾心を燃やした。

「検査結果で異常がなければ、お前の言う犯罪組織と親父も一緒に戦うが」と、哲夫に詭弁を弄した。

哲夫は無口になった。そして火を付けないタバコを口に銜えると顎をしゃくり上げ、その横顔を見せたまま数十分間、おし黙っていた。

宗一は席を立ち、警察署館内廊下の自動販売機でミネラルウォーターを二本買い、再び哲夫の待つ取調室に入る。

「哲夫、ミネラルウォーターを買ってきたから飲むかい」

「ありがとう」と一言発した哲夫は、喉が渴いていたのか五百ml入りペットボトルのミネラルウォーターを、一気に飲み干した。

三枝警部が顔を覗かせて「今、都庁の裁定結果の通知がきましたよ『今回の詳細内容から判断し、処置入院に伴う精神鑑定は出来ない』と言うことでした。それに今、藤代さんが来られたんで何時までも置いとくことは出来ませんから、息子さんを連れて帰って下さ

い」と言いに来た。

電話を通じての藤代のイメージとはかけ離れない、清楚感の漂う女性が顔を覗かせた。

宗一は「初めまして」と藤代に挨拶し、哲夫を伴い三人で警察署館内から表通りに出たが、哲夫は「用事がある」と言い残して、足早に立ち去ってしまう。

腕を掴まえても振り切って行くだろう事は容易に判断できることから、成す術もなく哲夫の後ろ姿を二人は見送っていた。

宗一は、脇に並び立つ藤代に視線を這わせると、困惑と言うよりも手を焼き尽くしてきた諦めの表情にも見てとれて、スリム体系でノーメイクの素顔がとても理知的で、思慮深そうな女性だとも思っていた。

1 - 8

藤代から二日後に、宗一に電話が掛かってきた。

「哲夫さんが家に戻って来てくれましたから、家の近くの山村精神科医院に秘かに相談をしたんです。そうしたら院長が担当して下さるそうで『一度本人を診察させてもらい、必要なら無味無臭の投薬を出します』と、言うんです。本人には気づかれずに家庭での治療ができて助かりますけど、婚姻届けを出していない私には『薬は出せない』と言う事でした。ですので、お父様に医院に来てもらえないでしょうか」と訊いてきた。

「そんな薬があつたんですねっ。院長が哲夫を診断して投薬治療の結論が出ましたら連絡を下さい。何時でも行かれます……」そう言つて受話器を置いた。

その夜に再び藤代から、電話が掛けられてきた。

「先ほど院長先生が私の知り合いだと言う方便で、家に来られたんです。哲夫さんは何か違和感を感じ取ったみたいで『夜だから、どうぞお帰り下さい』と言って家には上げなかったんですけど、帰られた院長先生から電話があつて『一目見ただけで判断が付きましました。立派な総合失調症です。緊急を要しますから投薬を出します。親御さんに当医院に来てもらつて下さい』と連絡がありました」

「矢張り、病んでいるんですね。明日の朝一番で山村精神科医院に行きますよ。湯河原へは二時間もあれば着くでしょう、その医院で藤代さん待つていてください」と約束をした。

宗一はこれまでに、NPOの総合失調症相談にアドバイスを求めて何度かメールで交信を試みていた。

そして又、哲夫の居住地である湯河原保険所にも電話相談を持掛けていたことで、明日が面談の約束日であつて、偶然にも重なった。

山村精神科医院への道のりは交通不便だと予め地図で確認し、下車駅の湯河原からタクシーで駆けつけてみると、約束時間には若干遅れはしたが、既に藤代は医院の玄関前で出迎えていて「済みません」と、化粧つけない清楚な素顔に笑みを浮かべて言った。

一見、下田屋風の山村精神科医院であつて、玄関を開け入るなりタクシーの音を聞きつけたのだろう、奥の部屋から「成瀬さん、こっちに来て下さい」と、大きな濁声で叫ばれた。

藤代と供に院長室と書かれていた粗末なドアを開け入ると、一見無愛想で横柄そうな白衣を纏う老いた院長が待つていた。

1 - 9

宗一は、もつとも苦手タイプの院長だと言う印象を受けた。

「初めまして、成瀬哲夫の父親です。色々とお世話になります、どうぞ宜しくお願いします」と言つて頭を深々下げた。

「あのですねっ、昨日の午後七時ころだったが、息子さんの症状を診断する必要があるんで医者とは名乗らず家庭訪問をしたんだが、一目で立派な総合失調症だと判断できました。相当病んでるし、一刻の猶予もなんののです。無味無臭の薬を出しますから、自宅で食品に振りかけて、本人には知らせずに投薬療法を続けなさい」医者はそう言うのと、症状に気付いた時期などを丹念に藤代に訊ねては書類に書きだしていた。そして医者は「父親のところに、音信が十二年間も絶たれていた息子さんが突如と相談に現れたんですね」と、事前に藤代から聞いていたのだろう情報を復唱をして、確認するように質問の矛先を宗一に向けてきた。

「そうでした。最初は息子から荒唐無稽のような相談に戸惑いまいけど、哲夫が帰った後で余りにも真剣な悩みごとだと思えまして、気になって置いていった資料を丹念に読み返してもみたんです。そして、ネット検索で真相を確かめてみた結果、精神を病んでるようだとそう思いが強くなりました。それから警察やNPOの総合失調症対策相談室や、湯河原の保険所にも相談中なんですが」と答えると「えっ、保健所ですか。それを早く言ってくれなきゃダメだあ。薬は出せませんよっ。入院する方法しかないです」と、医者は薬剤投与の推奨から一転、入院での治療を薦めだした。

保健所に相談をしていると言った事で、態度を一変させた医者 of 不可かえさに宗一は愕然とするのだが、家族での投薬療法は禁じられていて、保険所に知れたら困る事案なのかも知れないと、思い直した。

「院長の佐伯です」と、このタイミングで宗一に名刺を差し出した。「定年退職をしておりますで、今は名刺を持ちませんのでお許し下さい」そう宗一は言って、再び深々と頭を下げた。

「その保健所の担当者は誰ですか？」と、佐伯院長が訊く。

「生活環境課の木村さんです」と答えると、佐伯院長は直ぐに受話器を取った。そして数分、木村氏との会話を終えると「今からタクシーで保健所の木村さんに会いに行ってください。家庭での薬剤投与の承諾書を書いて持たせますから、保健所の署名捺印をもらって来てくさい。可能なら家庭療法として薬を出せますから」と言い、十分後に二枚の手書き書類を手渡された。

藤代とタクシーで保健所に向かって担当者の木村氏に会ってみると、総合失調症に関する資料小冊子を何冊も「参考にしてください」と言い、目の前のテーブル上に差し出した。

三十代半ばと思われる如才なさそうな木村氏は一方的に延々と雄弁に説明しだしていたのだが、家族の手で病院を探して説得入院させるしかないとの結論に導くばかりであった。

全く聞く耳を持たなくなっている哲夫を「説得して入院させる」との結論では、無駄な時間だったと思えてならない。しかも「現状では入院させられるベッドの空き病院を探すことは早期には無理な状況下であつて、辛抱強く探してください」と、木村氏は言う。

「もし入院先が見つかったとしてですが、家族が哲夫を説得できなかった場合には他にどのような手段がありますか。例えば強引にか」

宗一は唯一、木村氏に質問をした。

1 - 1 0

「強引に入院させるのは家族であつても法で禁じられていて、罪に問われます。何度も話したように嘘で説得をした場合には後々家族への恨みつらみが増幅していつて、修復できない亀裂が生じることがありますし、真正面からの説得を守って下さい」と言う木村氏の言葉だが、ただ虚しく響くだけだった。

——正常でないから説得出来ないことぐらい解ってくれよ。と思いつながら、隣の椅子で不安げに聞き入っていた藤代に向かい「佐伯院長から預かった薬品投与の承諾書を検討してもらってください」と話しかけた。

頷く藤代はバッグの中から取り出した佐伯院長の手書き書類の二枚を木村氏に手渡しながら「家庭での治療を望むんですが、お願いできませんでしょうか」と懇願をした。

木村氏は大きな文字で書かれた手書き文書に眼を通していたが「保険所としては前例が無いことです。から、家庭での投薬療法認可と言う承諾書は書けません」と言って断られた。

帰りがけの駅で、宗一は念のため佐伯院長に木村氏と話し合った結果説明を兼ねて投薬をもらえないかと相談するが、院長はにべも無く「約束だから出せません」と言い、一方的に電話は切られてしまう。

——何てことだ。どういつもこいつも無責任なやつらだよ。「家族が来れば薬を出す」と佐伯院長が言うから来たんじゃないか。こうしている間にも他人に危害を加えない保障は無いではないか。保健所としては、入院できる病院を探してから本人を説得する手段しかない」と結論づけるが、現状では空きベッドのある病院は容易には見つからないだろうとも強調される八方塞がりの状態で、帰途に着きながら込み上げる怒りは、収まらないでいた。

TVの凶悪事件ニュースを観るにつけ、哲夫ではないようにと祈る日々を送っていたのだが、藤代からの報告電話があつて「十月二十日、十三時五分発のロンドン行き航空で、哲夫が出国する」と言うものだった。精神の錯乱状態でありながらも、パスポート取得や細部にわたる出国手続き等は綿密に計画実行していたと藤代から聞かされて、驚くと同時に居た堪れない焦りを感じ出していた。

最早、一刻の猶予もなくなつて、十数軒ほど入院設備のある精神病院に電話相談をしまくつた。だが、空きベッドの有無を確認するものの「気長に二・三ヶ月程待つてもらえれば空き状況が見通せる」との回答ばかり。

最後の頼みと思い、湯河原精神病院に再度の執拗な相談を持ちかけてみると「それなら一度、親御さんだけでも病院に来て相談を受けてみて下さい。その際、初期に診断された医院の紹介状を貰つて来て下さい」と、丸山と名乗る相談員が言つた。

宗一は藤代に電話して「山村精神科医院の佐伯院長から紹介状を貰つて欲しい。そして明日の朝十時に湯河原精神病院にきて下さい」と頼んだことから、その日のうちに藤代から、山村精神科医院を訪ねて「紹介状を受け取りました」と、電話での報告を受けた。

——もし哲夫が出国してしまえば、機内で不祥事を引き起こし兼ねない。そうなれば空港に航空機は引き返して哲夫も家族も多大な責任を問われるだろう。よしんば、ロンドンに着いたとしても平穏な生活が送れるわけもなし、いずれ強制送還の憂き目に遭遇するだろうから、今の段階で必ず説得して入院をさせなければならぬまいと、新たに決意を抱いた。

1 - 1 1

藤代は、待ち合わせた湯河原精神病院に十時にタクシーでやって来た。

出迎えた宗一は「藤代さんには色々辛い思いをさせていて、本当にすまないです。今、医療の相談申請を受付カウンターで済ませていますから、番号で呼びだされたら行きましょう。それに家庭での症状履歴のデータ記入する用紙を渡されたんですよ。事前に記入しておいてくれませんか」そう藤代に言つて手渡しながら院内

の待合室に入って行くと、待合室内は老人達で混雑していたが、一番後ろの空席を見つけて二人は腰掛けた。

データー記入用紙に目線を落としたりした藤代は一瞬、戸惑うかのような表情を宗一に見せだした。

「実は哲夫さん、今年三回目の首吊り自殺を家の中でしたんです。何れも未遂でしたけど、今でも願望は強いと思うので眼が離せないでいるんです。お父様に話すと心配されるでしょうと思い、今まで話せませんでした。すみません」と言って頭垂れた。

眼を閉じる宗一の脳裏を走馬灯のように駆け巡るのは、高校・大学時代の在りし日の、精悍にマウンドに立つ、哲夫のエース・ピッチャー姿であった。

「貴女（藤代）が謝ることではないですよ。親として恥じなければならぬことです。それに献身的に尽くして頂いている貴女には、心より感謝をしています。その事実是用紙に書きこんでおいた方が、医師の判断材料になると思います」

「解りました」と、藤代は手際よく用紙に書き込みだした。二十分程が経過した頃だったが、受付カウンターから「五十二番さん」と呼び出しされた。

受付で指示された通路奥の相談室と書かれた扉を開け入ると、小さな机の前で歳枯れの白衣を纏った相談員が、背を丸めた格好で坐っていた。

丁寧に挨拶をした後に、相談員は「医師の丸山です」と名乗られた後、壁際に並び置かれた小さな丸椅子に坐るよう勧めてくれた。丸山と言う相談員だと思い込んでいたのだが、丸山医師だった。

哲夫の症状を記入した用紙と佐伯院長からの紹介状を藤代から受け取る丸山医師は、項目を丹念に眼を通し「解りました。相当、危

険領域に達していると判断出来ますよ。で、このまま放置は出来ませんので、即入院させましょう。明日、本人（哲夫）を説得して当病院に連れて来られますね。そうして下さい」と言い、一方的に結論付けた。

病院側から「入院できる空室は当分無い」と、これまで何度も断られ続けていたことは嘘だったのかと思いましたが、隣に坐る藤代は救われたような安堵の笑み顔を宗一に向けた。

「先生、有難う御座います。でも、哲夫を説得する際ですが、何らかのご協力を仰げるんでしょうか？」と、藤代と協力しても哲夫を入院させる説得など到底無理だと推測できるから、そう訊いた。

「いや、それは家族の領域ですよ。説得して必ず連れてきて貰わないと困る。やってみなければ解らんことでしょう。やってみて下さい」と丸山医師は言う。

1 - 1 2

「努力をして見ますが、多少の嘘を交えた方便で説得してみます」と、宗一は焼け気味にそう言った。

「ダメ。ダメです。親の嘘で入院させられたと恨みを買って、将来に渡って家族関係に罅が入ってしまった実例が多いんですから。それに保健所や診断なされた医院の主治医からも既に説明されて知っておられるとは思いますが、親でも強引な入院は罪を問われてしまいます。ですから、絶対に嘘や強引さを用いない説得で、必ず入院させて下さい」と、強い要望だった。

医師の理想言葉に逆らう気力は失せていて、軽い気持ちで「何とか説得し、明日中に入院させる努力はしてみます」と言い、相談室を出た。

藤代と連れ立って病院から湯河原駅にタクシーで向かっていたそ

の車中、藤代の顔色は蒼白の不安顔に変貌していたが、意気消沈していた宗一は、勇気付けの言葉を掛けられずに湯河原の駅に着いていた。

藤代と別れ際にやっと「明日の午前十時に、哲夫を説得して入院させましょう。必ず訪問しますから家で待っていてください」と、辛うじて約束をして帰宅の途に着いた。

翌朝、再び湯河原に向かった宗一はタクシーに乗り込んで、入り組んだ住宅街の一角に降り立った。そして解りにくい住宅街を歩き回って哲夫の家を探し当てて玄関前に立ったのは、午前十時三十分を回っていた。

物音一つしない閑静な住宅街の奥まった一角で、チャイム・ホーンを鳴らすことも躊躇ったほど、家の外壁には般若の面が不気味に睨みを効かせて掛けられている。その異様な雰囲気を感じ出しだす般若の脇には、防犯カメラがこれ見よがしに取り付けられていて、大きく「防犯カメラ作動中」と書かれたプレート版が威圧的に側壁に張りつけられていたのを見ると、以前に哲夫のブログで観た通りの家だった。

一目で過剰防犯を誇示した異常な家庭だと再び尻込み感が襲ったが、何はともあれチャイムを押した。

家庭内部のチャイム音は聞こえてこなかったが、間もなく玄関ドアが開かれて、無化粧の藤代が不安そうな面持ちで家の中から現れた。

「昨日はご苦労さん。家を探し回っていて少し遅れてしまったが、哲夫は居ますよね？」

「お早う御座います。昨日はすみませんでした。哲夫さんはまだ寝ているんです」

「そうですか。これ駅前を買ってきたケーキです。哲夫と食べてく

ださい。今日、説得する手順を書いたメモを持ってきましたよ。これですがね」と言い、藤代に二枚コピーした内の一枚と、ケーキを入れた手提げ袋を手渡した。

1 - 1 3

説得しようとする内容は、二十日ロンドンに旅だそうとしている哲夫に対して反対はせず、むしろ喜ばしいこととして説得する考えだった。

その為には健康と安全が第一で、病院で総合検査を受けて健康である保障を取り付けて置く必要があると言う、些か無理な理由付けをする内容だった。

「では、家に入ってください。タイミングを見て起こしますから」と藤代は言つて、玄関を開け入った。

狭い玄関の左脇には三畳ほどの台所があり、入り口には小さな事務机が置かれていて、玄関右の壁脇には階段がある。

宗一は、藤代から台所にある事務机の椅子を勧められて腰掛けた。

キッチンを背にした状態で坐る目前には、八畳ほどの和室への出入り口に掛けられている布製の半暖簾越しに、室内が覗ける状態だった。

「あそこの布団に包まって哲夫さんは寝ているんです。直ぐに起こしましょうか？」と、藤代は指さして言う。

「いや、起こすと不機嫌になるでしょう、目覚めるまで寝かしておきましょうよ。時間はたっぷりありますから」

宗一はそう言いながらも台所の壁に「呪われた家族云々」「犯罪組織集団による電磁波や超音波での攻撃、云々」と意味不明に書かれた何枚もの貼り紙がされているのを見回す内に、気分が悪くなっ

ていた。そして、台所の全ての柱には電磁波対策なのだろうアルミ箔が貼り付けられていて、息子の家とは到底信じ難い恐怖感で身の毛もよだつ思いに駆られるが、人間の脳機能の脆さも痛感させられていた。

暗示による作用なのかは解らぬが、突如、変異する原因はなんなのかと、悶々と考え込んで数十分が経過した頃だったが「哲夫さんが眼を覚ましたようです」と、藤代が宗一の傍に来て小声でそう囁いた。

「では、私が来たことを伝えて下さい」

「解りました」と言つて、目の前の八畳間で薄い掛け布団に蓑虫状態で包まって寝ている哲夫の枕元に、藤代は駆け寄った。そして耳元に顔を近づけると、宗一にも聞こえる程度の声で「お父さまがいらつて随分お待ちなの。起きてっ。すぐ来てっ」と囁いていた。

驚いたのか眼を大きく見開いた形相の哲夫と、部屋の入り口を仕切る半暖簾の下から覗いていた宗一の視線と重なった。その瞬間、息子とは思えぬ狼にでも睨まれたような眼差しに仰天し、恐怖感が漲りだした。

1 - 1 4

哲夫は布団の中に半身を起こし「何しに来たっ。帰れっ！」と、これまでの哲夫からは想像できない喧嘩口調の大声を、宗一に向かって投げてきた。

その瞬間、宗一は親子関係の維持は最早これまでかと憤るが「突然来て悪かったよ、済まん。どうしても相談事があつてなっ」と、必死に冷静を装いながら言う。

「話なんかしねえよ。いいから帰れっ！帰らねえと不法侵入で警察

を呼ぶぞつ！」

「えっ？親父をかい。それでもいいが、少しだけでも話をしないかい」

「うつせえ！ただ置かんぞつ、こらっ！」と言いながら哲夫は立ち上がり、出入り口の暖簾越しに高揚した赤鬼のような形相の顔を突き出してきた。

「いいからここに来て坐れよ。そもそもお前の方から相談に来たことじゃないかい。だから聞き知った以上はお前の身を案じるし、社会的な責任もあることで相談に来たんだよ」と哲夫に言った。

傍らに怯えて佇む藤代は、台所の隅に哲夫用に椅子を用意した。

哲夫は赤鬼の表情を崩さず渋々と台所に降り立つと、哲夫を説得しようと用意してきていた箇条書用紙を持つ宗一の手を指差して「手紙を持って来たんかつ！」と、怒鳴るように言う。

「手紙じゃないよ。哲夫と話すことを箇条書きにしたメモなんだ」

「じゃあ、それ貸せよっ！」

哲夫はそう言うのと、宗一の手からメモ用紙を取り上げた。そして、不貞腐れて椅子に腰掛けるとメモに書かれた文字を、嫌味を込めて大声で読み上げた。

読み終えた哲夫は「もういいだろう、帰れっ」と言い残し、一瞥も投げずに再び八畳部屋の寢床の上に半身を起こしたまま、坐り込んでしまふのだった。

見かねた藤代は哲夫の傍に行き、腕を掴んで再び台所に向かわせようと引つ張るが、哲夫は頑として動かなかった。

1 - 15

業を煮やした藤代は、無言で強引に腕を掴んで引つ張り哲夫を動かそうとしているが、その時、哲夫は「てめえ、何すんだっ！……」

と怒りを込めて捲くし立て、藤代を突き飛ばした。

藤代は怯むことなく立ち上がり、気丈な一面を覗かせて執拗な食い下がりを見せた。

これ以上、藤代が強引に哲夫を連れて来ようとしているのを見て危険だと判断した宗一は、腕力を振るわんとしている哲夫を制止するために、部屋に入ろうとした。

「入るなっ、この野郎っ！」と哲夫は言うなり、宗一に襲い掛かってきた。

「やるんならやってみろっ、哲夫っ！」と年甲斐もなく大声でそう叫び、襲い掛かる哲夫の両手首を咄嗟に力一杯、掴んで離さないでいた。

宗一は、病気以外の毎日は軽い筋肉トレーニングに励んできたこともあり、腕力では今の不健康な生活をしている哲夫には負けない自信があつた。

「お父っ！お父っ！」と、哲夫は一層の赤鬼顔で叫ぶ。

「なんだあっ！」宗一も、大声を出して負けずに言い返す。

「婆ちゃんがつ！婆ちゃんがつ」と、哲夫は意味不明な言葉を叫ぶ。
「婆ちゃんが、どうしたって言うんだっ！」と、切り返した。

「入院していた時の婆ちゃんを、俺は見舞いに行つたんだ」と、哲夫は在りし日の出来事を口走る。

「婆ちゃんも哲夫が見舞いに来てくれたことを一番喜んでいたのは覚えてるよ。普段から優しい子だって何時も言ってたし、俺もそう思ってる。だけど、それがどうしたって言うんだい、哲夫っ」

意味不明な叫びに、当惑しながら言った。

——哲夫は幼いときから、母よりも婆ちゃんに懐いていたのを思い出す。勝手気ままな母親だったから、未だに母嫌いが続いているよ

うだ。慕う婆ちゃんには既に他界していることも、哲夫にとってはマインナスに作用しているのかも知れない等と、瞬時に脳裏を掠めた。

多少の落ち着きを見せた為、哲夫の両腕を宗一は離した。すると再び八畳間奥の寢床に向かい、背を起こしたまま座り込むと、両耳にレシーバを当てがいだした。

藤代は哲夫に向かい「きちっと、お父様と話をしてよ。ねえ」と再び説得を شدした。

宗一もメモ書きにしたがって離れた場所ながら説得を試みるが、直視した哲夫の横顔は無反応だった。

時折、断片的に「オメエ達も犯罪集団に毒されてんだっ！オメエ（藤代）とも終わってんだから、俺に関わるんじゃねえよ！」と毒ずいた。

藤代は怒りを込めて、哲夫の耳に当てがわれているレシーバをもぎ取った。すると哲夫はやおら立ち上がり、部屋の奥から廊下に出たようだった。

1 - 16

「お父様、危ないです。古い日本刀を取り出してトイレに入ったので、もう限界だと思えます」と、藤代は血相を変えて進言をした。「えっ、日本刀ですか？……残念だがこれ以上の説得は無理でしょう。今日のところは諦めて帰りますよ。藤代さんもこれ以上哲夫に逆らわずにいたほうが良いですよ。気をつけて下さいねっ」と言い残し、宗一は後ろ髪を惹かれる思いで哲夫の家を後にした。

脱力感に襲われながらもタクシーに乗らずに駅方向と反対の海岸まで歩き、——永いこと入籍もしないままの境遇の藤代さん、どうして我慢し続けていられるんだろうか。子供を授かっている訳で無

し、愛情を持ち続けているとも思えない哲夫の態度。精神を患っているとは言え、デカダンス的に陥っている日々の生活に辟易感を抱かないのだろうか。長期に職もなくして同棲中の僅かな藤代の給金で遣り繰りしているのだろうか現状を想像するに、理解は出来ない。

世の男性が暴力を振るって別れさせないという事例なら聞いたことはあるのだが、哲夫は逆パターンであって、藤代との関係は終わったと言うことで同棲への拘りは無くなっているようだから、別れることは何時でも出来そうな藤代の心理状態が解らない。哲夫の親の立場からすると、甲斐甲斐しく介抱もしてくれている藤代には感謝心しかないのだが、親として、こんな状態を何時までも見過ごしている訳にはいかないだろう。

以前に藤代が、哲夫さんは自身の預金を取り崩して生活し、自身は給金での個々の生活を割り切っていてしていると訊いたことがある。本当にそうなのか？職に就かない永い期間の遣り繰りが、預金の範囲で賄ってこられたのかと、疑問を抱いたのを覚えている。だが、金銭的には何の問題もないと言う藤代の言葉を一先ず信じたことなどを思いつつ空虚な海面を俯瞰して、時を荒波で打ち消していた。

1 - 17

翌日、宗一に藤代から電話が掛けられてきて「あれから哲夫さん、旅行支度を整えて家を出て行ってしまいました。ロンドンには予定通り二十日に行く積もりだと思います」との報告だった。

——このまま放置は出来ない。どうしよう。どうしたらいいんだ。宗一は一瞬パニック状態だった。

「本気なら警察に相談をして事前に止めるしかないでしょう。ダメなら当日の二十日に成田空港に二人で行って、搭乗を阻止しようじゃないですか」と話し合った。

宗一は湯河原警察や成田警察、又、空港警察などに電話相談を持ちかけてみるのだが「罪を犯していない個人に対しての強制する手段はない」と、どの警察からも連れない回答ばかりであった。

諦める事は出来ずにあれやこれやと思案をめぐらしていたのだが、とうとうロンドンへの出発予定当日の深夜になってしまった。

深夜にも関わらず、再度の空港警察に電話相談を持ちかけた。

「今日の午後、精神を病んだ息子がロンドン行きに搭乗すると思いますから、どうしても強制で搭乗を阻止してくれませんか」と縋ったが「居住地警察に相談をした方が」と言っ、あいもかわらず逃げ答弁ばかりを連呼する。

夜も白々明けて、搭乗するだろう時間帯に哲夫を阻止するため間に合うよう家を出なくてはならない焦りが、怒りに変わる。

頼りない警察相談を諦めて、十三時五分発の時間が迫る中、午前九時に藁をも縋る思いで国土交通省に電話相談を持ちかけた。

伊藤と名乗る女性担当者は「ターミナル会社に相談をしたらどうでしょう」と、回りくどい説明を延々と聞かされた後に勧めてくれた。だが既に空港に出かけなくてはならない時間は過ぎていたことで、ターミナル会社のインホメーションに相談電話を持ちかけた。

山本と名乗る受付嬢が「調べて見ますから暫らくお待ち下さい」と相談に乗ってくれてはいたのだが、延々と待たされ続けて十分程が経過した頃だったが、眼の前のPC用プリンター上に置いていた携帯が鳴りだした。

「もしもし、成田空港に着いているんです」と言っ、藤代からの報告電話であった。

「ああ、着いているんですね。私は深夜から多方面に相談を持ち

かけていて、空港に出かける時間が無くなってしまったんですよ。今も空港ターミナル会社の山本さんと言う方に電話相談をしている最中で、本当に、ごめんなさい」

「いいんです。さっき北ウイングのカウンターに行って相談をしたんです。そうしたら驚く結果が判明したんです」と、藤代がそう言い終えると同時に、ターミナル会社の山本さんが電話に応答しました。

「あつ、藤代さん。ちょっと待ってください。今、ターミナル会社の方と話しますから」と言つて、インホメーション受付嬢との保留中の受話器を取った。

「息子さんは二十日の出発を繰り上げて、既に十七日に出国しておりました。ですがロンドン空港で入国を拒否されて一日留め置かれまして、翌日の十九日、詰まり昨日ですが、日本に戻されていることが解りました」と調べた結果を報告してくれた。

1 - 18

頭の中が混乱して冷静ではなかったが、ともかくも携帯の藤代との会話に切り替えて驚く結果を伝えると「私も同じことを聞かされていて、本当に驚いているんです。でも何も無く戻されてきているようで、少しホッとしています」と言う藤代と電話を切るが、間髪要れずに藤代から再び電話が掛けられてきた。

「まだ、空港内に私はいるんですけど、哲夫さんから今電話があつて『何でか解らんが、日本に戻されてお金を損したただけだ。都内のホテルに滞在しているから、暫らくは家に帰らん』と電話があつたんです。その状況を山村精神科医院に帰りに寄つて、院長にも結果を報告しようと思うんです。そして今夜また、お父様に電話をお掛けしますので、色々のご相談に乗ってもらいたいんです」と言う藤

代の声は、多少、弾んで聞こえていた。

自宅に戻った藤代から「院長は『不測の事態にならなかったのは幸いだ。これからは投薬を十日分ずつ哲夫さんの親御さんに出しますから、藤代さんが家で本人に気づかれない様にして、飲ませることを実行してください』と言っんです。ですから、お父様にもう一度来てほしいんです」と電話が掛けられてきた。

「それは吉報だ。院長の心変わりは二度とは無いでしょうし、山村精神科病院に明日行きますよ」と、藤代に伝えた。

翌朝、宗一は山村精神科医院に行き、十日分のセレネースと言う無味無臭の液体が入った小瓶を病院で買ったために、院長が用意した誓約書に宗一は書名をして藤代に投薬を手渡した。だがこの日の佐伯院長はこれまでとは違い、横柄な言葉遣いは意識的に控えられているようだった。

1 - 19

数日後に藤代から電話があつて「哲夫さんは二十五日の午後京都内からレンタカーで家に戻ってきましたから、夜の食事で哲夫さんに初めて味噌汁に投薬を入れて飲ませてみましたけど、その後一度も奇声をあげることがなくて効果的面でした。それに何の副作用もないようで、だいぶ精神が安定しているように思います」と、何時もより明るい声での報告だった。だが翌日のこと、藤代から再び電話が掛けられてきて「哲夫さんはレンタカーを都内に戻しに行くと言つて出たんですけど『五日間は家に戻らない』と言う電話があつたんです」と、藤代の声は再び沈んでいた。

——やはり、投薬療法では効果は見込めないのでは。そう思いながら宗一は思案に暮れて数日が経過した。

以前に呼び出された広尾警察の三枝警部から、電話があった。

「息子さん、シンガーの華さんが住んでいると思込んでいる広尾のマンション内に再び侵入し、今度はドア・ポストの中に自分の住所や本名の書かれた名刺を投函したんです。身柄は拘束していませんから当署に來られなくてもいいんですが、居住者は気味悪がっていますから、嚴重に家族管理をしてください」との注意喚起であった。

——このまま放置することは、他人に対して何らかの重大犯罪を起こしてしまうかも知れない。今すぐ哲夫を探し出し、親として成すべき対決をする時だろうとの思いに至り、明日から哲夫を捜し歩こうと決意した。

2 - 1

宗一は港区広尾周辺のホテルや旅館を軒並み訪ね歩いたり、高級マンション付近を日夜を通して必死に捜し回り、何としても哲夫の足取りを掴もうとしていたそんな三日目の十四時頃のことだった。

天現寺橋交差点に近づいた時に、何やら交差点舗道の信号待ち付近で、両腕を高く天に翳して交通整理をしているかのような奇妙な動作を繰り返す男が視界に入った。

近づくに連れ、以前に世間を騒がせたことのあるカルト教祖が、両腕を広げて天を仰ぐ姿のテレビ映像を彷彿したが、同時に宗一はピタリと歩みを止めてその場に立ちつくし、哲夫のその姿に息を飲み込んだ。

五分程度だったか、その場で哲夫の行動を見守るというよりも、膠着状態だったと思うのだが時間が止まっていた。

再び動脈の秒針が激しく刻みだし、意を決して重い足取りで近づ

きだした。その奇妙な動きをする哲夫の背後に立つが、腕を変形にかざし続けているばかりであって、無心状態なのか一向に気づく様子は見せないでいる。

勇気を出して声を掛けてはみるが、極度の萎縮状態に陥っているためか、脱水症状ぎみの宗一は、しゃがれた小声しかでなかった。勇気を出して、哲夫の背に手で触れた。

「おおっ！なんだっ、こんな所に来てっ！」と哲夫は驚いたように振り向くが、息子の面影はなくて眼を剥いた鬼のような形相を、以前のように再び見せた。

「なあ哲夫、今日は食事でもしてから親父の家と一緒に帰らんかい。どうだろう？」

気が付くと、遠巻に十数人程の好奇心な視線が注がれていた。

「みつともないから、この場所を離れよう、哲夫」

「おめえ（父）ウツゼー！救出パワーを付けてんだっ。けえれよっ！」

「救出って、華さんをかい？」

「フィアンセを見殺しにできっかつ！邪魔すんならおめえの心臓、挟ってからにするぞっ」

哲夫の言葉とは到底思えず、うろたえた。

「なあ哲夫、お前が信じている世界を一概に否定はしない積もりだよ。救出も手伝うよ。だから一先ず家に帰って、戦略を練ろうじやないか」

「俺（哲夫）の中では、もうお父なんて存在してねえんだ。何度も言わせんなっ。邪魔だからけえれっ！」

「ダメだ。哲夫！徘徊を止めさせに来たんだ。今日は何が何でも連れて帰る積もりだよ」

「もう、お前は敵でしかないっ」と言う哲夫は、赤信号を無視して

通行車両の多い道路を渡り始めてしまう。

2 - 2

「よせつ、哲夫っ！危ないから止めろっ……」と何度も叫ぶが、無事に道路を横断してしまつた哲夫の姿は、視界から消えた。

宗一は咄嗟に、華と言う人物が居住していると思い込んでいるマンションに哲夫は向かつたのではと思つたが、そのマンションの住所は判らない。そこで広尾警察の三枝警部に電話を入れて「哲夫は今、華さんが居住していると思い込んでいるマンションに向かつたかも知れません。そのマンションの住所を大至急教えてもらえますか？何をしでかすか心配で行つてみたいです」と懇願をした。

「いや、ダメですよ。いくら親御さんでも場所は教えられません」と断られてしまう。

「では、どう息子の犯罪を防止したらいいんですか？」

「付近を巡回させて、息子さんを見つけられたら注意を促しますよ」
「では、哲夫が見つかった時点で携帯電話に連絡を頂けませんでしょうか。天現寺近くで待ちますから」

「そうですか。それなら異変があつたら連絡しましょう」と三枝警部は言つた。

「お願いします……」と携帯電話の番号を教えはしたが、不安の増幅は抑えられないでいた。

歩き回つた老体の疲労困憊は頂点に達したと思ひながら、宗一は広尾警察署近くの小さな『白樺』と言う喫茶店に入り込んだ。そして警察からの連絡を待つこと二時間程が過ぎて虚しく喫茶店を出ると、既に町並みは夕闇に包まれていた。

車の行きかうヘッドライトが眩しく目に突き刺さりながら、成す

術もなく帰途に着くため駅へと向かいだしていたが、突如、携帯電話の着信音が鳴り出した。

三枝警部からだろうと胸の動悸が高鳴りながら通話ボタンを押すと、正しく三枝警部からだった。

「事件がありました。あなたの息子さんが腹部を負傷して、白金病院に緊急入院させられました。現時点での詳細も不明であって現状での面会は出来ませんことを、一先ず報告をして置きましょう」と驚愕の一報だった。

とうとう事件を引き起こしてしまったのかと、目眩に襲われながら歩道に立ち尽くしていたのだが、会えずとも力なく病院に足向けだしていた。

2 - 3

白金病院の受付で事情を話し、5Fの二十一号室だと訊き出した。二十一号室前には、五十歳位の男が椅子にドツカと坐っていて、背広の上着ボタンを外した間からは醜く膨らんだ腹部を覗かせたまま、まどろむ男の視線と重なった。

宗一は軽く会釈をして部屋をノックしようとする、男は「ちょっと待ちなさい。あんた、患者の身内かね？」と眠気が覚めたのか、威圧的な口調で訊いてきた。

「成瀬哲夫の父親ですが」

「そう。でも面会は許可できんのや。俺、刑事の張と言うもんやが」
「三枝警部さんから病院に入院していると聞いたんで」

「三枝警部の担当ではないし、事件担当部署も違うんや。暫らくは面会出来んから、此方から連絡するまで家で待機しておってくれ。」

「容態くらい教えてくれませんか」

「俺、医者じゃねえんで容態を訊かれても解からんよ。だけんど、

主治医は『命に関わることはなさそうだ』とも言ったので、大丈夫やろ」

「ご迷惑をお掛けしました」と宗一は軽く頭を下げて言い、錘を付けた脚を引きずるように病院を後にした。だが、このまま帰宅する気になれずに朦朧とした薄い意識の中で向けた矛先は、広尾警察署だった。

受付で聞かされた担当部署は、捜査一課であった。

頬が極度にこけた病弱そうな署員は名を名乗らず、先ずは宗一に椅子を勧めくれた。そして、「息子さんは、タレントの華さんが住んでいると思い込んでいるマンションに再び逢いに行ったんでしょ。その訪ねた部屋の玄関ドア前で、息子さんが出血して倒れていたんです」と、華奢な署員がそう話し終えた。

そして机の上に置かれていた茶碗を掴み取り、冷めているだろう茶を啜り出す。

「その訪ねた部屋の住人に、哲夫は刺されたんですねっ？」

——マンションに不法侵入して事を起こそうとした息子から、住人は身を守るうとした正当防衛的な事件なのか？と、そう思わざるを得なかった。

「今の時点で、これ以上の話は出来ません」と、華奢な署員は言った。

2 - 4

家で観るテレビニュースで、哲夫の事件を大きく取り上げていた。警察談話では、男が訪ねた港区区内にある某マンションの三階三号室の中には凶器らしきもので胸を一突きされたのか、住人女性が既に死亡していたという。この部屋を訪ねたと思われる男も、玄関前

のエントランス内に腹部を負傷して倒れているところを、近隣住民が発見して警察に通報されたと言うことでした。

負傷した容疑者は、これまでに何度かストーカー行為のような嫌がらせを被害者にしたことで書類送検処分の犯歴があり、現在入院している病院で順調に快復しているそうですが、今現在、凶器らしき物は何一つ発見されていないとのことでした。この事件の一刻も早い真相究明が待たれます」と報道された。

——居住女性が死亡していたとは驚きだ。なぜ警察は話してくれなかったのか？精神に病を持つ哲夫には正常な思考力などないはずで、不利に導かれて重罪を背負わされるのでは、などと分別かなわぬ思いが込み上げる意識の混濁で、宗一は朦朧としだしていた。

徒労感に襲われながらも藤代に電話をすると、受話器を通して聴こえてくるのは、既に泣きじゃくっていたのだらう、声にならないうる声ばかり。

八日目のこと、広尾警察から「明日、白金病院の面会時間三時に合わせて来るように」と電話があったが、病院での面会は戸籍上の親族に限るとのことと、藤代の面会は適わず宗一だけが病院を訪れた。

病院の玄関前には、事件から数日が経っていたにも関わらず、報道関係者だろう数人のカメラマン達が屯っている。

容疑者の親だと知られているのかは解らぬが、気づかれないうちに戻ろうかと思う尻込み感に襲われる。が然し、冷静になるに連れて知られても構わないと、度胸が据わり出した。

十二月の上旬にも関わらずこの日は気温が高く、汗ばむ額と首筋にタオル地のハンカチをあてがって屯う視線を一身に浴びながらも、

そ知らぬ振りで擦り抜けて病院ロビーに到達できた。

病室前に坐るあの張と言う刑事が、仏頂面を宗一に向けた。

「ご迷惑をお掛けしております」と挨拶するが、張刑事は宗一の挨拶を無視し「会っていいが、時間を守ってくれや」と、無礼な口ぶりで言う。

2 - 5

「お願いします」と言う、張刑事は無言で病室のドア・ノブを開け入って、宗一も後に従った。

簡素で狭い部屋のと真ん中に哲夫が横たえるベッドが設えてあり、臥せる哲夫の腹部あたりには、半円形に小高く防護処置が施されていた。

張刑事は、部屋のドア付近に置かれていた丸椅子に腰掛けて、何やらメモを取りだした。

面会時間の制約もあることだし、寝ている哲夫を起こさねばならないと思いつも、青白い能面のようにもある冷たい寝顔を見入るばかりであった。

突然、張刑事がベッドに近づいてきて「起こさんと、直ぐにタイム・アウトや」と、寝ている哲夫の肩を指先で突きだした。

眼が覚めた哲夫は、キョトンとした眼差しを向けるが、何の反応も示さず再び瞼を閉じる。

「眼を覚まさんかい」と、張刑事は再び哲夫に呼びかける。

哲夫は再び眼を開けて「何だよっ！」と重い口調で答えると、宗一と張刑事から視線を避けるかのように、天井の一点に視線を釘付ける。

「何か話せや」と張刑事は哲夫に話しかけ、部屋の片隅にある椅子に戻って腰掛けた。

「傷は痛むかい」と宗一が言うと「今まで姿を現さなかった卑劣な奴らから、華を救出したよ」と言う哲夫は、新聞・TVなどによる連日報道の凶悪事件内容とは極端に乖離した、妄想世界にどっぷり浸かり込んでいるようだった。

「哲夫が訪ねたマンション部屋の女性だが、殺害されていたそうだが、その現場でお前も負傷していたから入院しているんだが、何があったんだ？」と、宗一は哲夫にそう訊いた。すると「待てやつ。事件究明は警察の仕事だよ。そんな事まで話すの禁止や」と、メモを取っていた張刑事に制止をされた。

「刑事さん、親として今の哲夫の力になるには知るべき事だってあるんです」

妄想の世界と現実感の混濁に酔わされている哲夫が不憫でならないし、真実を見極められずに法定で不利な事を口走るのではないかと心配が先立って、そう反論をした。

「田沢と言う国選弁護人も選任されたんや。それに、警察も綿密な調査をしている最中やから、心配要らん。余計な詮索せんでくれや」と、張刑事は投槍にそう言った。

哲夫は、とろんとした眼をして人事のように会話のやり取りを聞き流していた様子は一変して大きく眼を見開き、断末魔の戦士を演じる歌舞伎役者のような形相を見せながら、部屋隅に坐る張刑事に視線を突き刺すと「こいつ等が、ありもしない事件をでっち上げてんだ。俺をこんな所に監禁しやがって、せつかく救出した華を何処へ隠しやがったんだ！」そう哲夫は訳の解らない理屈で張刑事に噛み付いた。

「哲夫。もういい解ったよ。興奮して力んだりすると体の傷に障る」と宥めて、張刑事に向かって詫びる気持ちで頭を下げた。

——哲夫は、警察の陰謀で入院監禁されていると頑なに思い込んでいるようだ。

張刑事は反論する気にはならなかったのだろう、苦笑いを浮かべているだけだった。

2 - 6

数日後、退院と同時に哲夫は殺人容疑で起訴された。

裁判出廷させられた哲夫の不利な情勢を回避すべく田沢弁護人は「山村精神科医院の既に出ている診断書の有効認定を求めたい」と裁判長に仰いだが、検察側は「鑑定留置の許で慎重に診断されることが望ましい」と田沢弁護人の主張を退けた。

宗一と藤代は初回に続いて次回の裁判も傍聴をした。

被告（哲夫）の精神鑑定結果を、裁判長は『軽度な心神耗弱』であつたが、責任能力は問えると認定を下した。

——なにが軽度心神耗弱であるものかと、宗一の胸のうちではそう否定をしたが、傍に坐る藤代も落胆の表情を浮かべていた。

裁判長は「これまでにパスポートを取得して外国に出国した経緯から、緻密な計画性に基づいた実行力が認められることや、被告は三度の自殺を図って未遂に終わっているその経緯なども含めて詳細に検証した結果、被告の証言は、公判維持にはなんら支障は来たさない」との判断を示したのである。

——近隣の特定住民数軒の犯罪一味から、超音波や電磁波による攻撃を連日受けていると言う哲夫の被害妄想的幻聴兆候は、今回の精神鑑定で完全に否定されてしまったようだ。

到底納得できない杜撰な鑑定だと怒り心頭の宗一だが、当初、山村精神科医院の佐伯院長の診断は間違っていたことになり、胸中には大きな疑義が漲った。そして佐伯院長の診断結果の方が的確ではないかとも思うのだった。

それは哲夫が病の発症を状況に合わせて堪えた（例えば、ロンドン行き航空機内で長時間、発症からくる奇声や行動を控えることが出来ていた。等）事実から、精神鑑定留置の際にも哲夫が意図的に発症を抑えることが出来ていて、そのことを鑑定医が的確に見抜けなかったと、想定できるからだった。

その後、裁判は三回・四回と進んでいた。

検察側の追及では、被告が訪ねた部屋の住人である被害者（羽鳥美香子）が、被告が訪ねた同時刻に殺害されたと認定された状況から、被告と被害者間で何らかのトラブルが発生したことは否めないと主張した。そして、逢ったこともない筈の女性シンガーを「フィアンセだ」と言い、計画的に錯乱状態を周囲に装おつての犯行であったとも主張する。さらには、当初のストーリーカー行為から殺害事件に発展したもので、被告の全面自白した調書とも矛盾が無いのだとも言いつつた。

人事のように証言台に立つ哲夫に検察は「羽鳥美香子を殺害に及んだと自供しているが、間違いはないのだね？」と、問うた。

2 - 7

哲夫は「奴らに報復したさ」と投やりに言う。

田沢弁護士は何度も誘導尋問だと検察尋問に異議を唱えるが、当の哲夫は意に返さず田沢弁護士は手を焼いているようだった。

——幻聴世界での出来事と現実起きた事件と噛み合うわけが無い。

無理やり辻褄合わせでストーリー化して供述させたと思えてしまうし、そんな哲夫の誘導は容易であつたのだらう。

「裁判長。異議、異議あり。でつち上げる検察側の主張は、到底承服できない。被告の全面自供に矛盾がないとも言いつけるが、凶器の存在も明らかにされてはいないではないか。もともと検察の主張基盤が軟弱で、もっぱら被告の錯乱に乗じた裏づけのない自白に基づいている。被告の『奴らに報復したさ』と誘導証言部分は削除を願いたい。そもそも精神鑑定結果に疑問を持つてゐる訳で、被告が『錯乱状態を計画的に周囲に装つての犯行』だと決め付けるのは推測でしかなく、言語道断だと言つてゐるんです。

錯乱状態を装つていたと認定するのであれば、根拠となる明確な立証をお示し願いたい」赤ら顔の田沢弁護人の、ボルテージは上がる。

裁判長は精神再鑑定の必要性は認めず、指摘された推測文言と被告の不用意な証言部分についてのみ、異議を認めて取り消した。

検察は「被告はその部屋に華さんが閉じ込められていると思つて訪ねたのではなくて、街で見かけただけの女性（被害者）の住まいだと知りながら訪ねたと供述していますよね」

——念を押すように相も変らぬ誘導尋問を繰り返す検察は、自白内容に沿つた立証をさせようとする、露骨で強引な誘導意図が窺える。哲夫は「華に決まつてんじゃないかねえか。華の住んでる部屋の中で、犯罪組織に監禁されてたんだから」と、自白とは矛盾した思い込みを述べた。

裁判長は「供述書に、街で見かけた女性の後を付けて知つた部屋だと供述しています。ですから、もう一度訊ねます。訪ねた部屋に居住する女性（被害者）は、華と言う人では無いことは知つていま

したか？」と、矛盾点の再供述を促した。

「華の部屋なんだ」と哲夫は面度くさそうに言うと、一瞬、傍聴席がざわついた。

田沢弁護士は被告の度重なる証言に成す術もなく、力なく異議の手を上げて「裁判長、再度の精神鑑定を行うよう、強く主張します」と言った。

「既に精神科医の判定が出ているわけで、再鑑定の必要性は無いと判断します」そう裁判長は断じるのである。

検察側は「被告の自白内容の信憑性は揺るぎなく、然るに、支離滅裂な戯言を駆使して意図的に混乱を招こうとしているに過ぎないし、華と言う女性シンガーは実在するが、居住地が全く違っている。被告が訪問したマンション部屋には羽鳥美香子さんと言う、殺害された女性が単身で住んでいたものであって、詰まりは被告は自供どおり街で見かけただけの女性の部屋だと知りながら訪ねたのは、紛れもない事実。被害女性にとっては、見ず知らずの被告が強引に部屋に押し入れれば、当然騒いで抵抗するでしょう。被害者は部屋にあった果物ナイフ状の凶器で防衛する際に揉み合って、意図的ではなく被告の脇腹に突き刺さってしまった。

2 - 8

被告は果物ナイフ状の凶器を奪い取って被害者の胸を一突きに刺し、逃走しかけて玄関前で倒れた」と、自供内容論拠の立証に躍りになっていくようだった。

「裁判長、異議があります。検察は『被害者が持つ果物ナイフ状の凶器を奪い取った被告が、被害者の胸を突き刺した』と主張するが、その凶器すら発見されておらない段階で、果物ナイフ状の凶器だと断定することも、凶器が部屋にあったものかどうかすら被告は供述

されていないではないか。解剖医の『果物ナイフ形状の凶器』だという見解を、そのまま供述書に引用させた疑義がある。詰まり、刺し違えたと言う論法は根底から覆る」と、検察の立証に田沢弁護人が赤ら顔で噛み付いた。

裁判はその後哲夫の支離滅裂な証言が続いて二転三転し、数ヶ月が経過した。

連日のようにマスメディアでは、被告が犯人であるかのような報道が続いていて、半病人のように宗一は自宅に籠りがちになっていた、そんなある日のことだった。

TV特番報道の検察記者会見で、港区のマンション居住者女性の殺害事件当日、目撃者証言が事件直後に警察で得られて居たとの新事実が公表されました。

目撃していた主婦の三人は事件発生時刻頃、同、事件現場のマンション非常階段出口で不審な男を目撃したと言うものであり、その信憑性は高いとして捜査をやり直したところ、今回、新容疑者の遊佐牧夫二十七歳の逮捕に至りました。

目撃した主婦の三人は、事件のあったマンション別階の居住者達で『事件当日、一階の自転車置き場に隣接した普段は使わない非常階段出口から、黒っぽい背広の上着を丸め、胸部から顔半分を被うようにあてがいながら飛び出してきた、不審な男を目撃していたと言ったことでした。』

二十代に見える痩せた一八〇センチ位のノツポ男で、サラリーマン風にも見えませんでした』と主婦三人の目撃証言を交えて、遊佐牧夫容疑者を任意同行ではなくて逮捕したと検察は発表したのだが、今まで目撃情報を公表しなかったのは『調査中であつたため』と言う、検察の不可解なコメントでしたと報じている。

宗一は飛び上がるほどの驚きだったから、その場で藤代に電話を掛けると「今、TVで知りました」と、受話器の中から嗚咽が漏れた。

2 - 9

宗一は、田沢弁護人に真相を訊こうと受話器を取った。

田沢弁護人は「これから出かける用事があるんだ」と前置きされたが「なぜ検察は重大な目撃証言を、事前に明らかにしてこなかったんですか？」と、素朴な疑問を田沢弁護人に訊ねた。

「目撃者を公判で明らかにしていないのは、検察側の隠蔽工作なんだろう。哲夫君には有利な材料が突如出現して有難いし、何よりも容疑が根底から崩れ去る可能性が出て来た訳だ。これまでも、警察は被告の有罪に支障を来たす証拠類などの一切は、隠してしまう傾向が時にはあるんで困ったものだ」と田沢弁護人は言い、そして「つい先日、事件の目撃証言者を独自の取材活動で見つけた某テレビ局なのだが、その裏付け取材を嗅ぎ付けた警察は急遽、隠密捜査をして、逸早く今回の逮捕劇に繋がったようだ。警察は今まで目撃情報を隠していたのが無視していたのかは解らぬが、哲夫君の有罪を免れるのが困難なケースだったから、幸運な出来事だった」と言った。

「隠す理由が解からんですよ」宗一がそう言うのと「起訴に踏み切った以上、無実だと面子が保たれんのだよ。それに加えて裁判審理の迅速化が要求されていることも背景にある。ワシ（田沢）の過去にも冤罪人を救出した裁判経験があるんだが、今は老体に鞭打って、辛うじて弁護を引き受けているのが精一杯」そう言いながら「だが大丈夫、心配要らんよ」とも言った。

「有難う御座います。何の力も無い名ばかりな親で、先生には大変お世話を頂ながら何のお礼も出来ず、本当に申し訳なく思っています」

「今回の事件は引き受けないで置こうと思っていたケースだが、被告に一度は会ってから判断しようと接見することにした。会ってみると激しい思い込み症状（精神錯乱）は会話で感じたが、実に好青年だった。事件以外の話では理路整然と論理だてた会話が出来たし、このままでは、被告の不正確な精神鑑定結果になりやしないかと懸念を抱いたから、弁護を引き受けることにした。だが、そんな予感的中してしまったようだ」と、田沢弁護士は話してくれた。

2 - 10

各メディアの報道が一転し、新たな目撃者を隠していた事への警察批判に傾きだしていたこともあり、哲夫への追及は和らいでいた。哲夫に取っては無罪放免となった最後の裁判を傍聴し、帰りがけに藤代の心労を癒そうと、夕食に誘って日比谷公園近くで見つけたレストランでビールと軽食を摂っていたところ、突然、食事中に藤代の目頭が潤んで見えた。

「藤代さん、どうしたの？」そう藤代に訊くと「哲夫さんの容疑が晴れて、本当に嬉し涙です。済みません」

「いや、本当に良かったですね。一挙に容疑が晴れるとは思えなかったから、思いがけずに無罪が立証されて喜びが込み上げてます」と、宗一は久方振りに晴れやかな気分で言った。

「哲夫さん、自分が殺害したような証言ばかり繰り返している状況は変わらなかったから、すんなり容疑が晴れるのかどうか、私、心配でした」

今時の女性には見られない古風漂う律儀な藤代が、同棲と言う形であれ哲夫を献身的に支え続けてくれている姿を知るにつけ、心底、

感謝の念を抱くのだった。

「哲夫は今までの間に、入籍について藤代さんと何度か話合ったとは思うんですが、未だに入籍せずにいたことを知って、親としては本当に責任を感じています」

「……哲夫さんとは同じ会社に勤めていたんです。哲夫さんの仕事ぶりが評価されて部室の長に抜擢されたんですけれど、そのことから先輩社員達の恨みを買いだして、哲夫さんの指示に従わなくなっていたんです。責任感のある哲夫さんは部下の遣り残した仕事までも肩代わりして、クライアントとの契約期日に間に合わす為に連日連夜、会社に居残って処理していたんです。でも、精根尽きたのか『今月一杯で会社を辞める』と私は哲夫さんから聞かされました。」

哲夫さんとは何度も昼食を共にした仲でしたが、一切、同僚の悪口や愚痴など聞かされたことはなかったから、驚きでした。でも、辞める決心をした理由は敢えて訊かなくても私には社内の無責任な良からぬ噂話が飛び交っていたこともあり、哲夫さんの心情は理解できていたんです。そのことが切欠で結婚と言うか同棲生活に入りましたんです。けど哲夫さん、無職中は籍を入れないと言われて今まで来ているんですけれど、それでも幸せでした」そう藤代は一気に話してくれた。

「矢張り、そう言うことでしたか。私もそれに近い会社内で起こった出来事の推測はしていましたんです。」

哲夫は精神の病を治してから就職先を見つける道のりはこの先長い事でしょう。ですから介添えは藤代さんの力に頼らざるを得ませんが、ぜひ今後もお力をお貸しください」

「……」

宗一の言葉に、藤代は何か言いたげな表情を見せながらも、押し黙った。

「何か藤代さんの気に障ることを言ってしまったら、御免なさい」
「いいえ、そうじゃないんです。ただ、お話して置かなければならないと思っていることはありますが、今はちょっと。でも、近いうちにきつとお話します。ですから今は許して下さい」そう言う藤代は、何か悩み事を抱えているようだった。

2 - 1 1

数日後、藤代から宗一の許に手紙が届いた。

食事のお礼と、今後の身の振り方に付いての心情を吐露した文面で、埋め尽くされていた。

「数年前から、哲夫さんの病状悪化に伴う幻聴が酷くなったことで、華と言うシンガーをフィアンセだと思い込むようになって、私との『関係は終わったから家から出て行ってくれ』と、哲夫さんから毎日のように聞かされていましたけれど、病気のせいで本心じゃないと聞き流してもいたんです。でも哲夫さん、それから何日も家を空けるようになりだしたことで、私自身が不安定な精神状態になってきていることを自覚したのです。

私の両親も近距離に住んでいますから、矢張り哲夫さんのご実家と同様に、私の実家も十二年間余りも音信不通を哲夫さんの言いなりに通しておりましたから、怒られるのは覚悟の上で連絡を取りました。

当然ながら両親からは酷く怒られましたけど、母は『哲夫さんの病状が快復した後は、未入籍で子供もいないことだから関係を白紙に戻して人生をやり直して見てはどうか』と言うんです。

私は哲夫さんへの愛情は冷めていませんが、幻聴とは言え『関係が終わった』などと言われ続けてきたショックは拭えていませんし、また『お前（藤代）の居ないロンドンに華を連れて脱出だ』と言う

ばかりでなく、実際に単独ではありましたが行動に移されてしまった現実を知り、深く落胆をしました。その時点でやり直しは無理ではないかと、諦めにも似た判断をしてしまいました。

何はともあれ哲夫さんの病状の快復が得られる迄は、哲夫さんを全力でサポートしようと考えているんです。でも、身勝手に自己保身的なことばかり書いてしまっていて、本当に済みません。これからも、お父様の変わらぬお力添えに頼らざるを得ませんし、宜しく願います」と、手紙は結ばれていた。

読み終えた宗一の心は萎えた。だが、当然と言えば当然のことだと藤代の胸中は理解できて、むしろ感謝の念を強く抱いた。

2 - 1 2

二年の歳月が流れて、二月の寒風吹きすさぶ日の午後だった。

各メディアは一斉に「港区内マンション住人殺害事件の遊佐牧夫に実刑判決が下されました。内容は計画的ではない犯行と断定し、情状酌量の八年と言う懲役刑が言い渡されました。そして、その犯行に及んだ詳細も明かされました。

現在は無実で釈放になっている元被告が、事件発生時にマンション棟内に不法侵入して訪ねたその部屋の中には、既に被害者女性（羽鳥美香子）と恋人関係にあった新被告の遊佐牧夫二十九歳（目撃された不審人物）の二人が既に居た。

部屋の外からドアを叩きながら「風呂場の窓を打ち破って救出してやるぞっ！」と元被告の激しい怒鳴り声に、遊佐牧夫被告は頭に血が昇って冷静さを失った。

『あいつは誰だっ！』と羽鳥美香子に訊くが『あの男は前にも訪ねて来て、ストーカー行為をしたことのある、見ず知らずの男なの。』

顔を覚えらるるからドアは開けないで』と言う。

遊佐牧夫容疑者は騙されていると思ひ込み『お前、あの男と何を企んでいる！』と怒鳴り争いだした。

その最中ドアの外にいる元被告がドアを再び激しく叩き、そして玄関ドア横の風呂場の窓を叩き割った音に、遊佐牧夫被告は殺されると、恐怖感を抱いた。

羽鳥美香子の望む関係決別を拒否し続けていた遊佐牧夫被告は、二人が仕組んでいると思ひ込み、食台テーブルの上に置かれていた果物ナイフを咄嗟に掴みとると、冷めた視線で睨みつけている羽鳥美香子に、憎悪の感情が一気に高ぶった。

止めようとする羽鳥美香子の胸の辺りを一突きにした遊佐被告は、玄関ドアを開けて外に飛び出して、面前に立ちはだかる男（元被告）に体当たりした。

横倒しになった男の腹部辺りを、手に握ったままの果物ナイフで無我夢中で突き刺すと、そのまま非常階段口に駆け寄って逃走を計った。だが「今は勘違いに気づいて羽鳥美香子に謝りたいし、悔やんでいる」と言う遊佐牧夫被告の自白内容で、ナイフも供述通りマンション付近の側溝内から見つかっていると言うことでした。

一部のマスメディアでは、新容疑者の父親は検察庁に在籍しているとの情報もありますが、現在は未確認です」と報じていた。

2 - 1 3

無罪放免日に合わせたように田沢弁護人の計らいで哲夫は葛飾の精神病院に入院できていて、二年の歳月が流れていた。

哲夫の症状が改善に向かったと園部担当医師の判断で、暫らくの間は自宅からの通院に切り替えられた。

藤代は、哲夫が退院した時点で哲夫と決別するため実家に戻り、

一人っ子であることから親の薦めが強い婿養子を迎えることに同意したと言う。

——正常な思考を取り戻した時の哲夫は藤代の居ない現実を知り、さぞかし嘆き苦しむことだろう。

親としてどう接し、何をなすべきかなどと幾多のもどかしい思いが、脳裏を掠める。

藤代のいなくなった哲夫の家に、宗一は暫らく滞在しながら哲夫の世話をした。

順調に快復した哲夫は、夢から覚めたように事件のことは何もかも覚えていないかのように、日に日に快活な振舞いをしだしていたのだが「俺、脳を患っていたようだから、お父や藤代には迷惑掛けたと思ってる。もう頭はスッキリしたし、これから仕事を探すよ」そう哲夫は、宗一が作った食事を摂りながら言う。

「もう少し通院したら、健康体に戻るよ。そうしてから仕事のこと、は緩つくり考えたらいいと思うよ。余生の少ない親父だが、まだまだ力になれることはある」

「俺、頑張って歳月を取り戻すよ」

「勇み足をしない程度に、自然体で生きたらいいさ」

「お父。……藤代のこと訊いていい」

内心で葛藤していたんだろう、哲夫は藤代のことを切り出してきた。

「二人の関係にまで親父が立ち入るのは止そうと思ったから、敢えてお前に話さないでいたんだよ。お前も知っているだろうけど、藤代さんは一人っ子じゃないか。先方のご両親にも十二年間も音信を断っていたということだから、大変、ご立腹されたんだそうだ。家庭の都合もあって『どうしても引き戻す』と言うご両親の説得に、藤

代さんは哲夫の為にもなると思って、此の機会に同意したそうだ」
「どうして俺の為だと言っただろう？」

「哲夫に服従し過ぎたと藤代さんは後悔しているようで、哲夫の為には良くない存在だったとも言っていた。退院と同時に手紙を残して去ったのは、双方で未練を引きずる怖さがあつたからだ、事前に話してくれていた。さぞかし辛い決断だったと思うよ。そんな心情を察してやれよ」

「辛かったんだろうなあ。両親にも詫びたいよ」

「その気持ちだけでいいと思う。藤代さんの心を乱してもいけないからな。でも、親こそこの両親に詫びに行くべきだと思って藤代さんに告げると、制止されたんだ。多分、この両親の怒りの矛先が親の私に向けられて大事になるよりは、自分の勝手な不始末を詫びる方が収まり易いと思っているようだった」そう話すと、哲夫は力強く頷いた。

哲夫は短期間に見違えるような回復力で、素直な哲夫が目の前にいる喜びに目頭が熱くなりだした。

—— 当分の間は哲夫の家に滞在して、寝食を共にする生活が続くことになるだろうと、思っただった。

2 - 1 4

半年が経過した頃だったが「二科展から封書が送られてきた」と、哲夫は久しい笑顔を宗一に向けて言う。

「二科展って、絵画が何か応募でもしたのかい？」

「以前から書き溜めてあつた絵画を、退院後に俺が二科展へ出展していたんだよ。ほら、これ見てよ」と言っ、封書の中から取り出した特選通知書を見せた。

宗一は哲夫の病が再発でもしたのかと思いが一瞬過ぎり、俄かに喜びの言葉も表情も作れずにいた。

「喜べよ。マジなんだから？」

「そりゃ、まさかなら嬉しいさ。とてつもなく嬉しいよ。哲夫は高校時代から美術科目を専攻していたのは思い出すが、部活の野球に没頭していたことの方が強烈な印象で脳裏に焼きついていて、美術も優秀だったことの記憶は、すっかり薄れていたよ」

「俺、会社を辞めてから十二年間もの間に、油絵は描き貯めていた。二羽の鶴が天を突く勇壮な姿の絵と、藤代の恥じらう笑顔を描いた二点を出版していたんだが、そのうちの藤代の顔の絵の一点が特選に選ばれたんだ」と言う哲夫の自信に溢れた表情からは、重い過去など完全に拭い去られているようだった。

授賞式の当日だったが、会場の隅で涙ぐみながら佇んでいた宗一の傍らに、何と藤代が擦り寄ってきた。

「暫らくぶりです、お父様。特選に選ばれておめでとう御座います。私も以前から哲夫さんが二科展に出席したいと言うことは知っていましたが、病状が快復してから出席するんだろぅと気にかけていたんです。こんなに早く結果が二コースに出るなんて驚きました。

これまでに何度も家の近くまで行きましたけど、どうしても哲夫さんに謝る勇気がありませんでした。お父様に全てを押し付けてしまい深く謝りますし、恥じてます。本当にごめんなさい」と言葉を掛けてきた。

宗一は驚きながらも「此方こそ、哲夫を献身的に長期間尽くして下さって感謝をしているんです。哲夫は賞よりも藤代さんが来てくれたことの方が嬉しいはずですから、後で逢ってあげて下さい」と、

そう言った。

「お父様を通じて『おめでとう』と伝えて下さればと思うんです」

「哲夫は恨んでいませんよ。藤代さんのご努力で完治した哲夫は感謝をしていますし、済まなかったとも言っていました。でも、貴方のご主人に顔向けできないのなら無理は言いませんが」

「本当に私は哲夫さんが好きなんです。ですから他の人と結婚する気にはなれませんでした。でも、哲夫さんに今さら許しを請うことは哲夫さんを苦しめるだけだと思います、逢わないように努めていたんです。でも今日は辛抱できずに来てしまいました。本当に御免なさい」

「そう言うことなら、貴方の大きな愛で包んでやって下さい」

「……有難う御座います」そう躊躇しながらも言う藤代は、特上の笑顔を宗一に向けるのだった。

完

登場人物・シチュエーションは

フィクション

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8283h/>

愛すればこそ

2011年10月4日01時25分発行